

## 東禪寺版大藏經補刻葉における刻工の一側面

―刻工「牛智」「蔣成」等の組み合わせ―

牧野 和夫

はじめに

東禪寺版大藏經補刻葉の刻工の精査を通じて福州版大藏經の刊・印・修についての若干の問題点を指摘し、従来の漢籍を含めた南宋刊本の刊行時期推定の基準の補正に及ぶことにする。以て福州版大藏經の書誌的調査の意味するところの一斑を示すものである。

既に高山寺旧藏〔南宋〕刊『大藏一覽集』卷二の刊行時期については東禪寺版大藏經補刻葉の刻工の精査より得られた刊行時期推定の基準を活用し、おおよその推測を試みた（『日本現在〔南宋〕刊『大藏一覽集』について』『実践国文学』86号 2014・10刊）。また、『大藏一覽集』の舶載受容の一端についても古く引用例『阿婆縛抄』を挙げている（牧野和夫「日宋の「版刻」を結ぶもの―十三世紀中後期の大藏經「補刻葉」に探る―」『日本文学』2002年7月号）。『阿婆縛抄』の生成の過程については難しい問題点もあるようであるが、

『阿婆縛抄』第九十七（密宗書籍）に（751c）、「出三藏記集一切經音義三十卷（玄應）。／諸經要集 法苑珠林。／内傳博要大藏一覽集。」と列記し、「此等必可引見事〔書〕也（云云）。」と注記しているのは留意される。南宋刊行『大藏一覽集』の舶載流布の速さを予想させるに十分な活用記事の一例であろう（『大藏一覽集』の流布については、別稿に譲る）。

東禪寺版大藏經の補刻葉の精査に基づく刻工の活躍時期の確定作業が結果的に齎す成果のひとつは、福州刊の南宋刊本の刊行時期推定に確度の高い多くの情報を提供できることである。

今回の報告は、その一端である。

一、東禪寺版大藏經の内、『首楞嚴義海』の刻工について

醍醐寺藏宋版大藏經の内、『大智度論積』卷九十一には尾題前行

に「十四昏尾 安撫使賈侍郎捨 泗 淳熙己酉歲重雕此板」とあり、淳熙己酉二十六年・1189の重刊の年記が認められることについては、『新指定重要文化財 8』（毎日新聞社 1983・12）所載書影によって明瞭である。同大藏經を収める経箱（南宋の唐地での製作）の製作年時も近年、慶元四年七月の漆工（漆匠弟子）墨書が発見されたことで慶元四年と判明した（経函第285函の内側面、小林芳規先生の御講演「宋版一切經に書き入れられた角筆点」〈2010・10・24 於醍醐寺〉があり、同時に公開展観された）。慶元四年は、1198年に当る。

かつて醍醐寺藏宋版大藏經の内、『首楞嚴義海』巻24について、「醍醐寺藏首楞嚴經義海巻第二十四の一字刻工名「賜」をめぐる一、二の問題」（『ナオ・デ・ラ・チーナ』8号 2005・1）と題して簡略な紹介を行ったことがある。醍醐寺藏『首楞嚴義海』は、乾道年間から淳熙初年頃にかけて平江を本貫・寄寓とした刻工の手によって刊行された後、東禪寺版に入蔵する、という経緯を経たものである。その巻24を摘記し刻工の具体例を示そう。その際、○にアラビア数字は、板数を示す。即ち「②牛」、「⑥賜」、「⑩」⑮ナシ」は、各々第2板の刻工が「牛」、第6板の刻工が「賜」、第10板から18板迄は刻工名が無いことを示している。以下、同様である。醍醐寺藏本では、『首楞嚴義海』巻24の刻工名は

①牛②牛（磨滅）③牛④ナシ⑤ナシ⑥賜⑦牛⑧牛⑨牛⑩⑮ナシ  
で一字刻工名「牛」は、東禪寺版では極めて稀である。施財刊語が

⑥廣州覺苑寺比丘尼惠成爲考王十三郎生界

となっている第6板は際立つて印面清爽で、他の板がいずれも等しく

ごく普通の印面であることを以て、第6板が刻工一字名「賜」の手に係る補刻葉であることが明瞭である。約六、七十年後の刷印・舶載と考えられる書陵部藏『首楞嚴義海』巻24では、どうなっているか。施財刊語を

①③⑥⑧⑮⑰広東運使寺正曾噩捨  
と作り、刻工も

①蔡仁②牛？③景④ナシ⑤ナシ⑥景⑦泗⑧浩⑨鄭刀⑩傳詔刊  
⑪傳詔刊⑫光⑬光⑭賜⑮景⑯賜⑰周文⑱浚（止）

と改まっている。第2板のみに殆ど不読ともいふべき刻工名「牛？」が認められ、印面は甚だしく漫漶状態である（一字刻工名「賜」「泗」については、牧野「日本舶載東禪寺版一切經の刊・印・修をめぐる一、二の問題」〔『実践国文学』62号 2002・10〕で若干考証したが）。『ナオ・デ・ラ・チーナ』8号所収中間報告において醍醐寺藏（東禪寺版入蔵）『首楞嚴義海』の一部摘記を行ったので、そのまま引用する。

「巻6尾題記左に単枠内「平江牛智／□□同開」

巻9・10尾題記左に双枠内「平江牛智／蔣成同刊」

巻17…①牛智刊②⑦牛⑧項思中刊⑨⑬項

巻19…①④牛⑤項

巻20尾題記左に単枠内「平江牛智／蔣成同開」

巻21…①牛③牛⑤⑦牛

巻23…⑪牛

巻24…①③牛⑥賜／廣州覺苑寺比丘尼惠成爲考王十三郎生界

⑦⑨牛

巻25…⑫第三面3行目双枠内「平江牛智／項思忠刊」

⑫三山□□□□男□□□□刊(2行重郭)(止)

卷27尾題記左に無粹「刊者牛智 項思中」

卷29尾題記左に双粹内「平江牛智／項思中開」

併せて参考資料を挙げ次のように記述した。

「平江の牛智・項思中・蔣成などの刻工が携わった刻書である。巻一尾の淳熙二年の僧咸輝上表を考慮するならば、『三國志注』(涵芬樓燼餘書録)に牛智・項中・蔣成を同じくし、淳熙己亥(三)年木記を有するという『作邑自箴』に牛智・項思中が見えることなど大いに参考になる。」

憶測を交えた結論として

「卷二十四第6板を除く多くの葉は、淳熙一、三年頃の刻、12世紀末頃の補刻活動以降の補刻活動以降の後印ということになる。平江府積沙版の刊大藏経に先立つ刊大藏経関連の平江宋代刻書として、醍醐寺蔵『首楞嚴義海』三十巻は、江蘇刊刻史上、極めて貴重な遺品と考えるべきではなからうか。」

と結んだが、その詳細は紙幅の関係で省略した。また、醍醐寺蔵『首楞嚴義海』卷二十四第6板は、「⑥賜」という一字刻工名である。『実践国文学』62号所収論では「醍醐寺蔵本の第6板の刻工二字名「賜」は、書陵部蔵本の第14・16板の刻工一字名「賜」と同一刻工ではなく、「書陵部蔵本の第14・16板の刻工二字名「賜」は、「広東運使寺正曾璽捨」と組み合わされた「林賜」で嘉定頃に活躍した刻工」とし、「醍醐寺蔵本の第6板の刻工二字名「賜」は、「廣州」での施財を資とした12世紀末頃の補刻葉に認められる「周賜」であろう、と思われる。」と記述した。丙午(1186)を持つ東禪寺版は、金沢文庫蔵大藏経

で見ると、

- 大般若波羅蜜多經
- 卷3①丙午①王良
- 卷129①賜①丙午 賜＝周賜
- 卷309①王悦①廣州居住林達琦?為自身丙午捨
- 卷393②丙午②良
- 卷454⑦丙午⑦王良
- 卷573⑦丙午⑦良
- 仏説人本欲生經⑩丙午⑩王良

書陵部蔵大藏経には、

- 大寶積経卷4⑧丙午⑧良
  - 大周新訳大方広仏華嚴経 卷23⑦⑧⑩丙午⑦王悦、⑧文
  - 大周新訳大方広仏華嚴経 卷46⑥丙午⑥良
  - 大周新訳大方広仏華嚴経 卷47⑪丙午⑪王悦
  - 大周新訳大方広仏華嚴経 卷48⑧丙午⑧良
  - 大周新訳大方広仏華嚴経 卷57⑤丙午⑤王良
- など挙げることができる。即ち、刻工「周賜」は、「王悦」「王良」などの刻工とはほぼ同一時期の活躍が予想されるのである。特に金沢文庫蔵『大般若波羅蜜多経』卷309「①王悦①廣州居住林達琦?為自身丙午捨」を考慮するならば、「廣州」での勸進に応じた施財刊語「廣州寛苑寺比丘尼恵成為考王十三郎生界」と組み合わされる「賜」は、淳熙十三年「丙午」(1186)頃の刻工「周賜」に他ならないであろう。

乾道年間から淳熙初年頃にかけて平江を本貫(乃至は寓居)とする

刻工の手によって『首楞嚴義海』が刊行されたが（あるいは、重刊か、刻工名を刻さないものが原刻か、などについては、現段階では不問とせざるを得ない。詳細は今後の印面調査などに譲る）、早くに淳熙の頃（十四年に近い）既に廣州の覚苑寺などに勸進を行いその際の喜捨を資に福州の刻工の手に係る補刻が行われたのである。更に淳熙十四年頃から安撫使買選の施財による大規模な補刻事業が展開するが、金沢文庫藏大藏經『首楞嚴義海』の段階に至ると、その後、「朽蠹漫滅」の板を抽出して寶慶二年頃以降「廣南東路轉運判官」曾璽がその財を喜捨して行われた修補が全面に及びほぼ寶慶二年頃以降の補修葉となつたのである。卷二七楚（570）尾題記⑩に

「朝議大夫廣南東路轉運判官曾璽 敬施俸資就東禪大藏經板内揀出朽蠹漫滅有妨看誦者重加刊換永久流通 寶慶貳年丙戌四月 日 謹題 監修 沙門 元彰 師□ 有輝 住持沙門 祖洪」

との記述が具体的な刻工名調査によって確認されるのである。

金沢文庫藏大藏經の内の『首楞嚴義海』卷一には、乾道八年十一月日の福州福清県靈鳳禪院臣僧咸輝の題記があり、総序（曾懷）縁起序（咸輝）義疏序（王隨）序（惟淨）標指序（苑□）集解序（胡宿）を収め、十六板に淳熙二年閏九月の僧咸輝の上表文などが収載されて入藏の経緯が知られる点で貴重である。乾道四年から九年に至る幹縁僧咸輝の勸進に応じて長財を投じた僧俗にわたる寺院関係者が名を連ねるが、「乾道四年五月日幹縁咸輝題」する卷三の十四板に「⑭平江府常熟県報恩蘭若住持伝教比」丘応輪 謹施長財開此經一卷、「乾道九年四月日幹縁咸輝題」する卷七の末には「大宋国平江府呉県利娃郷燈芯巷街北面南居住」仍市中心開綵帛鋪奉」仏弟子住持徐永年與伯母花

氏二娘子同男」徐洪辰家眷等謹施淨財壹拾口貫五伯文足共開」此經一卷」などあり、平江を本貫（乃至は寓居）とする刻工の関与と併せ見るとき、醍醐寺藏『首楞嚴義海』刊行における「平江府」のもつ重要性は、際立ったものとなる。

改めて醍醐寺藏『首楞嚴義海』の刻工名を毎巻に注記して示す（ただし、〽内は金沢文庫藏本によって補う）。

- 卷1・①～⑬ナシ
- 卷2・①～⑫ナシ
- 卷3・①～③ナシ④（1板6行下墨）⑤～⑬ナシ
- 卷4・①～⑬ナシ
- 卷5・①～⑮ナシ
- 卷6・①～⑬ナシ⑭尾題記左に単枠内「平江牛智／□□同開
- 卷7・①～⑮ナシ
- 卷8・①～⑪ナシ
- 卷9・①～⑪ナシ⑫尾題記左に双枠内「平江牛智／蔣成同刊
- 卷10・①～⑫ナシ⑬尾題記左に双枠内「平江牛智／蔣成同刊
- 卷11・①～⑭ナシ
- 卷12・①～⑮ナシ
- 卷13・①～⑩ナシ⑪（尾題記左に単枠内「刊字項思中／呉門賈惇信」
- 卷14・①～⑨ナシ⑩（尾題記左に双枠内「寓平江項思中／呉門賈惇信」
- 卷15・①～⑱ナシ

- 卷16…①～⑬ナシ
  - 卷17…①牛智刊②～⑦牛⑧項思中刊⑨～⑬項
  - 卷18…①～⑧ナシ⑨（6面6行左）墨丁？⑩～⑬ナシ
  - 卷19…①～④牛⑤項⑥～⑨ナシ
  - 卷20…①～⑬ナシ⑭尾題記左に単枠内「平江牛智／  
蔣成同開」
  - 卷21…①牛②ナシ③牛④ナシ⑤～⑦牛⑧～⑮ナシ
  - 卷22…①～⑭ナシ
  - 卷23…①～⑩ナシ⑪牛⑫～⑭ナシ
  - 卷24…①～③牛④～⑤ナシ⑥賜／廣州覺苑寺比丘尼惠成為  
考王十三郎生界⑦～⑨牛⑩～⑮ナシ
  - 卷25…①～⑧ナシ⑨牛⑩～⑪ナシ⑫第3面3行目双枠内  
「平江牛智／項思忠刊」  
△⑫三山□□□□男□□□□刊（2行重郭）（止）△
  - 卷26…①～⑭ナシ（ただし、尾題記途中で了、不審）
  - 卷27…①～⑨ナシ⑩尾題記左に無枠「刊者牛智 項思中」
  - 卷28…①～⑬（2面のみ）⑭（3面）ナシ
  - 卷29…①～⑪ナシ⑫尾題記左に単枠内「平江牛智／項思中開」
  - 卷30…①～⑭ナシ
- 平江の牛智・寓平江項思中（忠）・蔣成などの刻工が携わった刻書であることは明らかである。卷十四尾題記（刊語）中「蔣誠施錢參貫 足薦亡前妻牛氏生界」の一行は、刻工に「蔣成」「牛智」の居ることと何か係わるのであろうか、もしその場合、版刻を生業とする蔣・牛両氏の婚姻を介した氏姓間の結びつきには誠に興味深いものがある。

これらの勧進・刻雕・入蔵・補修などの事項を加えて経年列記するならば、

乾道四年戊子1168 『首楞嚴義海』卷三「幹縁咸輝題」

乾道八年1172 『首楞嚴義海』卷一、

乾道九年1173 『道八年十一月日福州福清具靈鳳禪院臣僧咸輝題』

『首楞嚴義海』卷七「幹縁咸輝題」

淳熙二年1175閏九月 謝表（咸輝）

淳熙三年1176十月 謝入蔵表（咸輝）

淳熙十三年丙午1186 刻工「王良・王悦」担当補刻葉に干支

「丙午」刷印多し

淳熙十六年己酉1189 醍醐寺蔵『大智度論釈』卷九十一、

尾題前行「淳熙己酉歲重雕此板」

慶元四年1198 醍醐寺蔵大蔵経、経箱に「慶元」四年製作の墨書

寶慶二年丙戌1226 金沢文庫蔵『首楞嚴義海』卷二七第10板

「轉運判官曾噩敬施俸資・重加刊換」

ということになろう。

## 二、内閣文庫蔵『東萊先生詩集』二十卷目録一卷について

ここで留意すべきは、牛智・項思中（忠）・蔣成など複数の刻工名を同じくする刻書が存することである。内閣文庫蔵（別41・4）『東萊先生詩集』二十卷目録一卷 唐六冊である。

a、内閣文庫蔵『東萊先生詩集』二十卷目録一卷の書誌・刻工

内閣文庫蔵『東萊先生詩集』二十卷目録一卷の書誌事項を簡略に記す。

内閣文庫蔵 別41・4

東萊先生詩集 二十卷目録一卷

〔南宋乾道 初・二年跋刊〕

唐六冊

①後補の板帙に入る。

〔近世前期〕後補灰汁色表紙(22.3×16.4cm)、

左肩打付「東萊詩集序目(一之四・五之八・九之十二・十三之六・十七之廿)と墨書。

右肩に「昌平坂／學問所」(単梓墨文印 4.3×3.0cm)

②見返し 近世後補(第二〜六冊、左下に双梓朱文「淺草文庫」)

③跋(2丁)、左右双梓(19.2×14.4cm) 有界(界幅約1.3cm)

十一行々二十字。

目録

「東萊先生詩集目録／(11) 呂本中居仁／(1) 第一卷／(2)

暮歩至江上／∴／∴∴

白口、上單黒魚尾

④左右双辺(19.4×14.4cm)、有界十一行(界幅約1.3cm)、行二十字

版心白口上單黒魚尾

総裏打(改装)。所々、朱点など施す詩あり。

⑤、⑥尾題毎卷末最終行(11行)「東萊先生詩集卷第二(十九)」。

卷第一・二十は本文末二行アケに存。

卷二十尾題下に「終」と墨書。(二〇一四年三月十二日調査)

刻工名を拾うならば、以下の通りである。アラビア数字は、丁数。

刻工表

第一冊 序

金章 1

蔣成 2

目録

惠中 2・14・31・37

ナシ 1

賈琚 3・12・15・16・21・42〔賈欠〕

金章 4・27・28・35・36〔墨訂あり〕

李忠 5・25・26・32・38

李詳 6・8・13・23・24〔定〕欠画

蔣成 7・11・29・30・39・40

牛智 9・10・33・34

〔欠不明〕 17・19・20・22

李〔欠〕 18・43・44

李憲 41

第二冊 卷一之四

卷第一

賈琚 1・2・3・6

李忠 7・8

金章	蔣成	牛智	賈琚	卷第五	第三冊	卷五之八	金章	賈琚	李忠	李詳	卷第四	蔣成	牛智	李詳	金章	惠中	卷第三	金章	李詳	蔣成	牛智	卷第二	惠中
17	7 ・ 8 ・ 9	5 ・ 6 ・ 16	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4				9 ・ 10	5 ・ 6 ・ 7 ・ 8	3 ・ 4	1 ・ 2 ・ 11 ・ 12		9 〔□成〕 ・ 10	7 〔□□〕 8 〔□智〕	5 〔□詳〕 6 〔□□〕	3 ・ 4 〔□□〕	1 ・ 2		7 ・ 8	5 ・ 6	3 ・ 4 ・ 9 ・ 10	1 ・ 2		9 } 11

蔣成	牛智	金章	卷第九	第四冊	卷九之十二	牛智	蔣成	欠不明	金章	賈琚	金章	卷第八	李詳	賈琚	惠中	蔣成	卷第七	賈琚	蔣成	牛智	惠中	李忠	卷第六
5 ・ 6	3 ・ 4	1 ・ 2				10	9 〔蔣□〕	4 ・ 5 ・ 6 } 8	9 ・ 10	3	1 ・ 2		9 ・ 10 ・ 11	5 ・ 6 ・ 7 ・ 8	3 ・ 4	1 ・ 2		11 ・ 12	9 ・ 10	7 ・ 8	5 ・ 6	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	

牧野：東禪寺版大藏經補刻葉における刻工の一側面

李忠	賈琚	李忠	項思	牛智	李□	蔣成	惠中	李忠	金章	賈琚	李詳	惠中	賈琚	李忠	金章	惠中	賈琚	李忠	項思	牛智	李□
3	1・2・5・6・9		6	7・8	9 「離奇」 <small>漢洛</small> 一作	1・2		9	7・8	3・4	1・2・5・6・10	7・8	5・6・11 「長常」 <small>一作</small> 臥	3・4	1・2		9・10	7・8			

第五冊 卷十三之六  
卷第十三

欠不明	牛智	欠不明	項思	牛智	蔣成	李詳	李忠	項思	蔣成	賈琚	牛智	惠中	欠不明	金章	項思	賈琚	蔣成	李詳	項思	牛智	蔣成	
2・6	1・10		5・6	3・4	7・8・9	1・2		5・6	3・4・9・10	1・2	9・10	7	6	5	3・4	1・2・8	10	4・7・8				

第六冊 卷十七之廿  
卷第十七

李□	3・4・7
金□	5
李章	8
李忠	9
蔣成	11
卷第十八	
惠中	1・2・5・6・9・10
李忠	3・4・7・8
金章	11
卷十九	
李詳	1・2・7・8・13
賈琚	3・4・6・14
項思	5
牛智	9・10
李忠	11・12
卷第二十	
李忠	1・2
蔣成	3・4・7・11
項思	5・6
金章	8
李詳	9
惠中	10

この南宋刊本は、「慎」字を「御名」と注し南宋孝宗の時期に適うも

ので、乾道二年（1166）の曾幾跋文に、乾道元年沈公雅が「刻于吳郡」とあり、刊年・刊行地などに問題となるような点は指摘できない。序文中の年期に入木追彫などの手が加わった形跡も差し当たり認めたい。

「金章」「蔣成」「惠中」「賈琚」「李忠」「李詳」「牛智」「李憲」「惠中」「項思」、計十名の刻工を確認できるが、このうち、「蔣成」「牛智」「項思」の三名は第一章で検討したごとく乾道年間の活躍をほぼ確定できる刻工である。

b、刻工「牛智」「賈琚」などをめぐって

阿部隆一氏『中国訪書志』（昭和51・11 汲古書院）には、刻工「牛智」などについて参考となる典籍の書誌解題を、二点拾うことができる。その一は、

「韋蘇州集 存卷七（零葉）唐韋応物撰〔南宋前期〕刊

〔宋〕修 一冊

後補金砂子散し紺色表紙（三二×二〇・二種）、襯紙を挟み、包背装。本文卷首「韋蘇州卷第七」、次行低五格「蘇州刺史韋応物」と題す。大題の次に低二格を以て目録を列ねて正文に接続する。左右双边（二三・四×一六・五種）有界十行、行十八字、校注小字双行。版心白口単黒魚尾、「韋七（丁付）、下象鼻に、賈琚、李中、牛智、乙琦（以上原刻）、徐琪、馬良（宋修）の刻工名あり。玄弘樹に欠筆が見られる。

卷七は第八葉までを存し、以下欠、その第八葉の次に、卷六の第十九葉（卷末の葉、版心に「韋六 十九」と）が附してある。「文祿堂／書籍記」の印あり。王記著録本か。

この本は藏書印から見て王氏文祿堂の旧物であるが、王記には十巻と著録されている。丁志益影（配元刊本）・劉影著録本とは同版らしく、王記は欠筆が構字に至っているので、紹興刊本としている。しかし天目統著録の宋大字本・北京図書館蔵（十巻拾遺一卷）の乾道七年平江府学刊通修本にこの本は該当する如くにも思えるが後考を俟つ。蔣志著録宋刊本とも本版は行格を等しうするが、同版か否かは未詳、蔣志は「宋諱自寧宗嫌名廓字以上大抵闕筆以板式及行款定之南宋臨安府陳宅書籍舖刊本也」と云う。本版文字大にして端嚴重厚、この本には後修が加っているが、なお宋代の補刻である。刻工の賈琚は紹興四年蘇州・孫佑刊吳郡図経統記、修の刻工の馬良は嘉定年間刊重校添註音弁唐柳先生文集・寧宗頃刊周易本義・詩集伝・淳祐二年大庾県肅刊心経政経・宝祐五年湖州刊資治通鑑紀事本末・紹定二年平江府刊吳郡志、徐琪は寧宗頃刊晦庵先生文集の刻工にも見られる。従つてその補刻は南宋中期からや、後期に入りかけた頃であろう。刻工より察するも本版が浙刊たるは明かである。」（549頁）

明らかに「賈琚」「牛智」は（以上原刻）として原刻の刻工の中に数え、「刻工より察するも本版が浙刊たるは明らか」とする。しかし、次の指摘、「天目統著録の宋大字本・北京図書館蔵（十巻拾遺一卷）の乾道七年平江府学刊通修本にこの本は該当する如くにも思えるが後考を俟つ」は本稿の記述に有益である。すなわち「乾道七年平江府学刊」

に係る「原刻」の刻工「賈琚、李中、牛智」と理解可能になり、『首楞嚴義海』や『東萊先生詩集』と同じく乾道二至九年頃の平江府刊本と考えて全く無理がない。ところが、阿部隆一氏『中国訪書志』によれば、紹興頃（南宋前期）の浙刊との審定に適うものの如くであり、『首楞嚴義海』での検討結果と相矛盾するのである。

「賈琚、李中、牛智・蔣成・項思中」を南宋前期の浙の刻工とする旧来の南宋刊本の刊行時期推定の基準が訂されなければならないのではないかと、とも考えるのである。「賈琚・李中・牛智・蔣成・項思中」は、乾道二至九年頃の平江府本貫（寄寓、ないしは、ゆかり）の刻工である。

「賈琚」に係る第二の典籍解題は、「韋蘇州集」解題文中に、同一刻工を指摘した『吳郡図経統記』三巻である。

「吳郡図経統記 三巻 宋朱長文撰 宋紹興四年序刊（蘇州・孫佑）三冊

後補紺色表紙（三二×一九七糎）、金鑲玉裝、原料紙縦二九・二糎。首に元豊七年九月十五日州民前許州司戸參軍朱長文上の「吳郡図経統記序」（首一葉補写）あり。卷末に元祐元年四月十五日臨邛常安民書の「書吳郡図経統記後」、元祐七年十二月朔大雲編戸林慮序の「図経統記後序」、姑誌其刊鏤之歲月云越明年歲在庚辰八月望日朝請郎通判蘇州權管軍州事祝安上書の「図経統記後序」、紹興四年六月初十日漣水孫佑書の刊書跋を附する。本文巻首「吳郡図経統記卷上」、次行低七格「朱<sup>景</sup>撰」と題し、毎巻大題後目錄を以て本文に接続する。

左右双辺(二一×一四・八種) 有界九行、行十八字、注小字双行、每行字数不定。版心白口單黒魚尾、「統図経上(―下)(丁付)」、下象鼻に、乙戌、王彦、郭奇、郭、牛実、金□、金、嚴発、嚴、顧仲、顧、賈琚、黄富成、黄富、黄、石成、張通、張□、鄭益、鄭、屠□、屠、宥、友の刻工名あり。玄驚樹の字に欠筆が見られる。卷中間々欠丁あり、明の銭穀の手筆補写が入っている。

：(中略)：

祝安の後序によれば、本書は北宋元符三年庚辰に刻梓されたが、その北宋本は今伝わらず、本版は紹興四年孫佑が重刊せしめたもので、佑の跋に「自庚辰八月樞州祝君鏤版題跋之後距今紹興甲寅寔三十五年佑被令保守時兵火之餘図籍散亡(中略) 因授学官孫衛補葺校勘復為成書」と。刻工名を検するに、王彦は南宋前期刊文選・南宋初浙刊妙法蓮華経(尊経閣文庫蔵)、牛実は南宋初刊史記集解の南宋前期の修・南宋初刊資治通鑑目錄、顧仲は南宋前期刊竜龕手鑑、賈琚は南宋前期刊韋蘇州集、張通は南宋初刊新唐書の南宋前期修の刻工中にその名が見える。いずれも皆紹興から南宋前期の杭州圏の刻工である。(482頁)

と、「賈琚」を含め、王彦・牛実・顧仲と併せ「いずれも皆紹興から南宋前期の杭州圏の刻工である」と審定したのであるが、少なくとも「賈琚」は乾道二至九年頃の平江府本貫(寄寓、ないしは、ゆかり)の刻工である可能性が高い。

他に尾崎康氏『正史宋元版の研究』(汲古書院、1981:1)に拠れば、内閣文庫蔵『東萊先生詩集』の刻工「牛智」「蔣成」「賈琚」「項

思」「金章」「李忠」六名と刻工名を同じくする〔南宋前期〕刊〔同中期〕修〔同〕印の典籍一点があり、書誌解題を掲出しているのので、紹介かたがた引用する。「南宋前期刊一〇行本(いわゆる紹興本)」と標して、次の如く記す。

「(三) 国志残本(存魏書三〇卷)〔南宋前期〕刊〔同中期〕修〔同〕印 一六冊 北京図書館蔵

首に元嘉六年の裴松之の「上三国志注表」二葉があり、次で「三国志目錄上」(低七格) 晋平陽侯相陳 寿 撰」と題して魏書の目錄が六葉続く。

巻首は「武帝紀第一(隔三格) 魏書(隔三格) 国志一」と題し、陳寿の名を掲げないで本文に入る。左右双辺、中国版刻図録によれば匡郭は二〇・六×一四・五センチ、每半葉一〇行、行一八〜一九字・注文小字双行二〜三字。版心は白口で、「魏志幾(丁付)(刻工名)」と題し、単魚尾、稀に補刻と思しい葉の上象鼻に大小字数がみえる。

避諱欠筆は兩録に桓字に至ると明記され、百衲本の三巻でも「玄玠 朗 敬 弘 殷 匡 竟 貞 楨 勗 桓」の諸字にされている。

刻工名は涵録に、まず五七名、そしてそれと別に版刻やや異り、版心に大小字数を記し、別本補配の葉であろうとして八名が、また中国版刻図録に南宋初年の浙中の良工として一二名が列挙され(うち李詢以外の一一名は涵録と重複)、さらに百衲本から王政の一名が追加採録される。

次にこれらを列挙するが、右肩に\*印を附けたものは、後述するよ

うに補刻刻工と思われるものであり、末尾一行の八人が涵録補配といわれるものである。

<sup>2</sup>乙可立 乙成 乙信 <sup>4</sup>牛友 牛志 牛智 牛実 王乙 王允  
 王牛 王宗 王彦 王政 王彬 王郭 王懂 <sup>5</sup>\*石昌 <sup>6</sup>朱宥  
 \*朱春 <sup>7</sup>\*吳宗 吳詢 李中 李安 李忠 李恂 李通 李詢  
 李懋 沈端 <sup>8</sup>昌庚 昌叟 金成 金彦 金章 金屠 金從  
<sup>11</sup>張二 張昇 張通 郭奇 陳忠 <sup>12</sup>屠友 惠忠 惠道 項中  
<sup>13</sup>楊惇 楊謹 賈陳 賈珺 <sup>15</sup>劉恭 蔣成 蔣謹 許忠 鄭昱  
<sup>19</sup>\*龐汝升 \*龐知柔 <sup>20</sup>嚴志 <sup>21</sup>顧仲 顧忠

乙 金 成 李 奇 宥 彦 屠 琚 郭 嚴  
<sup>4</sup>文昌 毛端 毛政 <sup>7</sup>阮甫 <sup>10</sup>徐泳 徐英 <sup>11</sup>曹興祖 <sup>13</sup>詹世榮  
 列挙された刻工は、残三〇巻のうちの、まして本来の六五巻の一部であろうが、これだけでも南宋初期の紹興ごろの刊本のそれと一致するものが多い。すなわち、北宋初から始められて紹興初に及んだ思溪円覚藏經と六、紹興九年の文粹と二、紹興刊とみられる通典と六、紹興ごろ兩淮江東東軒運司の刻の漢書と六、そのほかほぼ前後した時期の明州刊の文選や唐書などに共通の名がみられる。避諱欠筆が欽宗の「桓」に止ることとあいまって、南宋初期の刊本であることは確実にあり、従来、紹興刊本と呼ばれてきたことはほぼ妥当であろう。ただし、標記には南宋前期と慎重を期した。

一方、このなかには南宋中期ごろの刻工があり、北京目録も版刻図録も宋刻通修と記している。百衲本の三巻の本文には補刻葉らしいものはないが、首の目録は八葉ともおそらく補刻葉であって、そこに\*印の五人の名がみえる。」(323頁〜326頁)

前掲の如く、刻工「牛智」「蔣成」以下六名を含む十二名(中国版刻図録に南宋初年の浙中の良工と)に即して「南宋初期の刊本であることは確実」「従来、紹興刊本と呼ばれてきたことはほぼ妥当である」とし、「慎重を期し」て「南宋前期」と標記した、と訂しているが、刻工「牛智」「蔣成」以下六名(李忠(中?)、金章、惠忠、賈珺)は、前述のように「平江ゆかり」の刻工であり、乾道年間の活躍が確認される刻工たちである。

また、『阿部隆一遺稿集 宋元版篇』第一巻(汲古書院、1993・1)には、「惠中」「項思中」を同じくした一点を紹介している。

「春秋経伝集解 三〇巻 晋杜預撰(宋紹興)刊乾道七年・淳熙一三年至宋後期通修(江陰郡)

(陽明文庫藏)巻一・二配日本南北朝刊本 一六冊。厚手覆表紙が附されるが、元表紙は室町期の縹色表紙(二六・四×一六・九糎)、室町期の筆で「左伝幾之幾」と外題。巻一・二の首冊は日本旧刊本で補われ、宋刊は巻三より存し、巻末に杜預の後序、次に淳熙丙午重陽郡守趙不違書の修刻跋が附さる。本文巻首「春秋経伝集解莊公第三(低七格)杜氏(隔二格)尽三十二年」、巻末「春秋卷第幾」と題し、尾題下に小字双行の経注字数あり。左右双辺(二〇・七×一三・九糎)有界十行、行十六乃至十九字内外、注小字双行、行廿五廿六字内外。版心白口單黒魚尾「春秋幾(丁付)」。下象鼻に刻工名があるが、版心は破損が多く、識読し得る名は、顔□、裴益?、裴拳、裴与、金文、惠珉、惠中、惠道、吳佐、項思中、黄康、康、周旻、周旻、徐浩、徐友、

徐益、卓允、卓顯、陳榮、陳宗、陳彥、沈源、沈澄、沈忻、沈汴、沈熿、沈熿、沈彬、杜俊、湯榮、榮、潘亨、李懋、陸靖、六靖、陸榮、郎春、劉智。その多くは修補の工名である。また中縫に間々「乾道辛卯重換」「直学王錫校正重換」「直学葛熙靖監修」等の修補年紀や校者名が刻されている葉がある。玄弦敬驚警徹弘泓殿匡筐竟恒貞徵懲樹豎議桓完構觀の字の多くは欠筆をしているが、慎の字は修刻の葉にのみ間々末画を欠くが一定せず、避諱は光宗の惇敦以降には及んでいない。卷九の第十九・廿葉、卷十四の第六、卷廿の第十九、卷卅の第十六葉は室町時代の補写。「陽／明／藏」「近衛家」の印記あり。

：（中略）：

この跋からは江陰郡で紹興初本書を出版したが、板が磨滅したので、淳熙十三年趙不違が新に鐫梓重刊したかの如く一見うけとれるが、この本について実際検するに、修補は一度ではなく、中に淳熙より前の「乾道辛卯（七年）重換」の修補年紀の葉があり、それより古い刻、即ち原刻と思われる葉も見出され、修補は南宋後期にまで及んでいる。従って本版は、既に度々引用した経史書の刻板を地方官庁に督励せる紹興初の詔に応じて、紹興年間に刊刻され、その板木が漫欠したので中間（恐らく乾道七年）やや修補したが、さらにその漫漶が甚しくなったので、不違が郡守となった翌年の淳熙七年僚友等と分担した校讎を加えて大々的な補刻を行い、不違が跋中に修補を怠らずまめに行えと後人を戒めているのは刊刻の実状を考える上に甚だ興味を抱かせる所で、その如く後にも通修を続けて重刷されたものであることが判明する。此はさらに刻工名の側からも次の如く確認し得る。ただ本帙は版心の下象鼻の欠損が甚しい憾みがあるが、上記の刻工中原刻と思わ

れるのは、呉佐、項思中、陳彦、沈忻、李懋、陸靖等で、杜俊は乾道辛卯重換と刻された葉に見えている。（319頁～321頁）

との指摘を考慮するならば、少なくとも杜俊は「項思中」より後の「乾道辛卯」（1171）の補刻葉を担当した刻工であり、「項思中」「惠中」などは宋紹興初期刊の原刻葉を担当した刻工となる。

しかし、前述の如く東禅寺版大藏経の補刻葉の精査に基づく「刻工の活躍時期確定の基準」に基づけば、項思中などは乾道期の刻工であり、「杜俊」「項思中」は乾道年間という活躍時期を同じくした刻工である。かくて、この基準に則した他の「印面」の新たな判断が今後の課題となるが、本稿の意図する範囲を超える課題であり、次稿以降に譲ることにしたい。

### 結び

刻工名が「刊・印・修」の審定基準の根幹に係る重要な手がかりになることについては、中国版刻史を辿るならば、古くより指摘されて久しいことに気付くのである。しかし、判断基準の根拠の詳細となると、宋版の遺存例の乏しいこともあり、検証は極めて困難であった。とりわけ、福州の刻工については有益な遺存典籍の少ないこともあって殆ど手がかりは無きに等しく、また単行の漢籍を中心に展開してきた中国版刻史研究の流れもあり、仏書に及ぶ例は比較的少ない、と云わざるをえない。ここに福州版大藏経の每板の書誌調査が有効且つ必須の状況となっていたのである。

本稿は、調査途上ではあるが、醍醐寺藏宋刊大藏經の目録刊行の近い事情を鑑み、遠からず調査の深化に伴い浮上することになる課題、即ち単行の仏書や漢籍に関する既知の情報を加えた総合的な調査研究への試掘的な一歩と位置付けた研究報告である。御批正・御教示を切に希う次第である。

簡便な刻工名の情報ハンドブック『古籍宋元刊工姓名索引』（上海古籍出版社 1990年12月）によれば、「李忠」・「李憲」の組み合わせは、乾道九年御製序を有する『東坡集』に存する、という。すべて今後の課題である。

\* \* \*

本稿は、本源寺現蔵「三聖寺旧蔵」福州版大藏經（一部思溪版混配）の調査を軸に、醍醐寺藏宋版大藏經についての既発表拙論の詳述を意図したものである。

既刊の金沢文庫藏宋版大藏經の目録を主として参照（不審点については宮内庁書陵部藏宋版大藏經を以て確認した）し、展開した「刻工名」調査に基く成果の一部でもある。既に「南宋刊『大藏一覽集』とその周辺」と題した口頭発表（2014・2・24、共同研究「日本における宋版受容の研究」研究会於国文学研究資料館）で内容紹介を了えている。

御所蔵の貴重な典籍につき閲覧・調査には格別な御高配を賜わりま

したことをこゝに銘記し、厚く御礼申し上げる次第である。

なお、本稿もまた、平成二十六年科学研究費基盤（B）（課題番号70123081）助成による調査報告をも兼ねるものである。今回の報告に引き続き、「刻工名より見た日本見在舶載典籍の一斑」と題した口頭発表を予定している（併せ活字化も予定）。併読賜われれば幸甚である。